教授は，大きな頑健そうな身体と厚い手で，あたたかく迎えてくれ，2日間に亘り，教室の若いスタッフや婦長達をふくめた討議に参加し得た。教授室や外来は，石造りの伝統を誇る古い建物にあるが，新しい治療教育の施設は，近代的な日本で普通にみられる建物の建設中のなかに九分通り出来上っており，これから，このKinder Klinikも飛躍をむかえる時期であったが，老教授の後継者がいないことをひとしく若い研究者は嘆いていた。われわれの言語発達の類型化の研究（1972）にはつよい関心を始し，いろいろな示唆を与えてくれた。ロンドン大学では，Rutter教授は，丁度不在で，集団適応研究の中心であるBartak博士が，丁寧に研究所内を案内してくれ，昼食をともにしながら，このグループの研究について討議の相手になってくれ，また，モーズレー病院の名称の病室も案内してくれた。

認知障害説をとるWing教授のいるこの精神医学研究所は，一方，知的能力を可成り重要視しており，多くの共感をよぶ研究の方向性をもっている。

2. 精神健康に関する研究

数年来，マズロー理論を中心に，数名のグループで検討してきたが，ここ一年は，臨床事例について，彼の欲求階層説の実証性を中心に事例研究を重ねてきた。現在のところ，事例によっては，可成り明確に把握しうるものもあるが，一概にいえない面もある。またグループで研究した修士課程の山田克子君は，高校生，大学生を対象にして，質問紙調査を行い，因子分析によった結果は，マズローの理論をほぼ検証する成果を上げているとみとめることが出来た。

この1年の歩み ― 昭和49年度― 村 上 英 治

1) この年もまた，心理臨床の諸領域にわたって，私なりの実践をつみ重ねてきた。この臨床の場で出会い，かかわりをもった多くの人びとから，いかに私自身数えられてきたことであろうか。臨床における研究とは，こうした人びととの取り組みを離れたところでは，まったく意味をもたない。臨床実践即研究との視点を，常に忘れることなく，自戒の一端としていきたいと考える。

2) 私にとって第1の臨床実践の場としての医療臨床の領域では，前年度までの基本路線に沿って，今年もまた，精神障害者，特に精神分裂病者たちとの不断のかかわりをとおして，彼らが分裂病を生きる，その生きざまを模索しつづけてきた。ロールシャッハ法にもとづく現象学的接近は，依然私および私の仲間にとっての中核的課題であり，症例研究も重ねられつつあるが，一方，精神分裂病の基礎的過程を，根源的な意味での「個別化原理」の危機的様態であるととらえる視点から，分裂病者の家族との距離を問題にしての探求は，大学院生池田らとの共同研究として，第23回東海心理学会大会（昭和49年6月）に報告され，さらにその後の症例を池田が加えることによって，本巻に「精神分裂病における“人間学的均衡”としての距離」と題する小論にまとめられた。

同様，この大会に，中京大学武田らによって報告された，ここ数年，八事病院における社会復帰病棟での実践は，さらなる具体的施策の提案をもあわせ，やはり本紀要に，「精神病者の社会復帰に関する研究（第2報）」として報告された。真の意味での自己実現を彼らに期待する志向性にもとづくものである。

3) 第2の臨床領域としての，障害児療育の場は，今日いよいよ重要な意義づけを私自身に賦与する。本年度また臨床棟の仲間とともに，重度障害幼児の母子通園，集団療育の場を提供することによって，この子たちなりの発達を援助していく努力をつづけてきた。それとともに年中行事ともなった，コロニーにおける教育研究実習では，この年はじめて，新らしい療育実践の場として，「こばと学園」が加えられ，18名の仲間とともに，障害児者とのかかわり体験を深める貴重な機会が得られた。紀要第21巻には，前年までの体験記録が，「重度精神薄弱児への人間学的接近（第4報）― 三たびケイ子と―」，「重度精神薄弱児への人間学的接近（第5報）― 発達するということ ―」と題して報告されたが，本年度の体験実践はそのあとをうけ，「重度心身障害児への人間学的接近（第6報）―『ことば』ある子と ―」との標題のもと，まとめられ，本紀要に所載するところとなった。

精神薄弱児者の広く適応行動の発達をすすめる意図に沿っての，適応行動尺度の作成さらにその吟味は，今年度もその解説の上梓，また特殊教育学会などでの，統計的な分析についての口頭発表などで展開されているが，この研究についての主導は，コロニー，発達障害研究所富安，愛知教育大学松田の手に委ねられた。私自身，しかしこの面からのアプローチにも期待するところ大きいことは今さら云うまでもない。

4) 第3の臨床領域としては，いわゆる学生相談活動をとおしての実践が，私のやはり大きな柱でもある。昨

年1月，広島西条で開催された，全国学生相談関係者が集まっての共同セミナーで提案された成果は，文部省刊「厚生補導」第95号に，「学生の適応上の諸問題」として，その一端が要約されたし，また教育心理学会第16回大会（49年9月）でのシンポジウム，「教育と臨床」の席上，私なりの問題提起が，具体的な事例の紹介を前置きとしてすすめられた。大学における学生指導の上でも，臨床心理学的観点に即して問題とさるべき多くの観点があることを提案したかったからにほかならない。

5) 臨床諸領域のうち，私自身今直接関与していない部門，矯正臨床とよばれるべき分理が第4にある。昭和35年から2年間，フルブライト研究員として，カリフォルニヤ大学に留学したときの主題はしかし，日米非行少年の比較研究であった。その成果は諸事情のため今日まで公にされる機会がなかったが，このたび当時の研究プロジェクトの主任であったDr. Devosの尽力によって，彼との共著の形で，その一部がLebra, W. P. 編に成るYouth, Socialization and Mental Healthの第12章として陽の目をあびるに到った。Violence and Aggression in Fantasy: A Conparison of American and Japanese Lower Class Youthとの標題のもと，TATを用いてクロスカルチャー的研究を行ったものである。Dr. Devosに厚く感謝の意を表したい。

6) 今年もまた先学續教授の研究遺産のあとつぎは，すべて終るに到らなかったが，東京大学出版会刊行の「心理学研究法」シリーズ 第11巻「面接」を續教授との共編の形でようやく上梓し得た。さらに，昨年の中広研での仕事をうけついで，その続報としての「購買的動特性からみた商品類型の試み」が，電通久野らとの共同研究として，中部広告研究第6号に報告された。故教授の学恩に師いることまだ足りない自らを恥ずる次第である。

1 年 の 経 過

小 嶋 秀 夫

教室のスタッフに加わってからのこの1年は，過去の仕事の整理と，それを基にした将来の仕事への準備のために費やされた。

1. 親子関係自体の研究に関しては，自分の研究目的にとって最適の概念化と測定の問題を解決することが重要だと考えた。このことに関して，日本心理学会第38回大会のシンポジアムで提案した。また，関連した実証的研究は，近く，*Japanese Psychnlngical Retearch*に現われる。

2. 1.の研究と関連する子ども側の変数は，幾つかの側面から検討した。まず，いわゆる「認知様式」の領域では，WitkinやKaganの概念の測定の問題で障害が起こり（日本教育心理学会第16回総会発表），これを解決することが重要だと考えた。問題の1つは，用いる装置にあり，このinstrumentation問題に首をつっこむことになった。このうち，Rod-and-frame Testに関して学内の他学部の協力が得られ，測定精度を上げた装置が近く使用可能となる。もう1つの問題である測定手続きに関しては，従来のデータの再分析から，若干の手掛りが得られた。

攻撃性に関しては大きな進展はなかった。ただ，稿を求めきれたものを機会に，1969年の章（児童心理学講座第8巻 金子書房）を補うものとして，理論的考察を行い，将来に備えた。これは，そう遠くないうちに現われると思われる（幼児心理学講座 第3巻 日本文化科学社）。

金沢で始めかけていた乳児の予備観察は，この1年間完全に中断した。条件を整備し，新しいアィディアで観察を開始するには，まだ若干の時間を要する。なお，将来に備えて，発達研究のデザインとデータ分析法を研究しつつある。

3. まだ極めて未熟な形においてであるが，社会における教育心理学・発達心理学の研究者としての役割の問題に，視野を広げる必要性を感じて来た。この関心は，間接的な形で，上述の攻撃性の考察，児童心理学の進歩1975年版の概観，および，久世・長田と共著の教育心理学年報1974年度の展望－家族関係の教育心理学的研究－の中に表現されている。

この1年，学内と学外（国内・国外）の研究者・院生の方から，有益な示唆を受け，有効な資料の提供を受けた。また，学内の技官や事務の方から，多くの助力を得た。いちいち，お名前はあげないが，これらの方々の援助と協力，場合によっては競合から，多くのものを得たことを感謝する。